

Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: Strawberry Fields in Central Park + Dakota House)

《ウェイトー稼業》

これまでに何度か触れてきたが、ニューヨークで過ごした年数とほぼ同じ期間となる4年間、「Kレストラン」(現在は「Kすし」)でウェイトーとして働かせてもらい、生活費を稼いでいた。

ウェイトーといってもいわゆる正社員ではなかったため、時給1ドル50セント(当時の金額)とチップが収入源だった。ニューヨークに限らずアメリカでは、高級なレストランなどは別として、一般のレストランで最初からウェイトー、ウェイトレスを本業として働いている人はほとんどいないと思う。学生やミュージシャン志望、ダンサー志望、俳優志望、アーティスト志望など夢を持ちながら渡米して、生活費のために働いているケースがほとんどだろう。

自分がウェイトーとして働いていた当時も、年齢こそ異なるが様々な夢を持った人が働いていて、とても刺激的だったのを覚えている。大学卒業直後に渡米してウェイトーをやっていた自分もかなりの変わり者だが、店には強烈な個性を放っていた人がたくさんいた。同じ入試試験をパスして入って来た人間たちが集まる大学では、せいぜい出身地や性格、キャラクターの違いがあるくらいで、この店で出会った人たちほど強烈な個性を放っている人は少なく、ニューヨークではそのレベルも違っていた。ドラッグなどに手を染めている危ない人、絶対に日本の会社社会では遭遇できないような佇まいの人もいたし、勿論、尊敬できる人、刺激を受けた人、面白い人もたくさんいたが、ここではとても書ききれないような個性的な人ばかりだった。でも、そんな世界が妙に楽しくもあった。

肝心のウェイトーの仕事で苦労したのは英語。浪人時代に頭に詰め込んだ基礎的な文法や単語が頭に入っていたくらいで、日本で生の英語に触れる機会なんてほとんど皆無だったため、オーダー・ミスの連発だった。「苦労」と言ってしまったが、学生時代に読んだ矢沢永吉の『成り上がり』の影響か、ここぞという時には「ハッター」も必要という潜在意識が働いていたのだろう…。マンハッタン中のレストランを捜し歩いた挙句、漸く雇ってもらえた「Kレストラン」の面接時にも迷わず「英語は大丈夫です！」などハッターに近いことを口走ったが、オーナー含め他の同僚たちに迷惑のかけ通しとなるまでに長い時間は要らなかった…。普通だったら、とくにクビを切られていたと思うが、その後4年間も動かさせて頂き、(歴代の人からするとかなり頼りない感じで、たまたまタイミング的になってしまった感じではあったが…)最後の1年半ほどはヘッド・ウェイトーなる職に就いていたことは我ながら奇跡に近いと思う。

日本に帰国する際にオーナーであるおやじさんに、「約15年の店の歴史の中でも3本指に入るとんでもないウェイトーだった！」と言われたが、今ではそれも勲章のように感じている。それだけオーナー・ミスが酷かったわけだが、本当に様々な人たちに助けられ、自分のクビを切らずに使って頂いたおやじさんには今でも頭が上がらない気持ちだ。それほど酷いウェイトーだった自分のクビを切らなかつたおやじさんの度量も広かつたのだろうが、あれだけのミスを犯しておいて辞めなかつた自分もかなりの変わり者で、どこか神経が図太かつたのかもしれない。だが、勤務時間が迫ると恐怖感が襲ってきたり、店に行きたくないと思う日もたくさんあったが、ずっとニューヨークで生活していくためには休むことはできず、とにかくお客さん相手の商売なので、お客さんから逃げてしまっただけでどうにもならないと自分に言い聞かせて店のドアを押し開けた…。でも、何だかんだ言っても自分がハッターをかました英語のせいなので苦労でもなんでもなく、クビにされなかつたことだけでも感謝しなければならないが、自分から辞めなかつた理由もある。

自分が渡米してニューヨークのJFK空港に降り立った日の最初の晩に、当時単身赴任していた方の家に泊めてもらったのだが、その方から言われた言葉がウェイトー時代の自分を支えていた。「ニューヨークで生活していくことは本当に大変だから、もし運良く仕事が見つかったら3年間ほどはじっと我慢して働きなさい」という言葉があったが、多少の不安があらながらも憧れのニューヨークに降り立った興奮、音楽に対する夢と希望に溢れる自分にとってはとても胸に響いた言葉だった。だから、店でどんなに嫌な思いをしても、恥をかいても、自分からは絶対に逃げないと心に決めていたように思う。そして、その言葉通り、2年目辺りからはレストランの仕事も楽しくなってきた、同僚は勿論、常連のお客さんにも頼まれるようになった。以前このコーナーで紹介したマンハッタンの病院で入院中の時には、黒人のカップルの常連さんがジャズのCDと励ましの手紙を届けてくれるなど、親しくしてもらったお客さんの中には今でも手紙やメールでやり取りしている人も多く、自分にとってはかけがえのない宝だと思っている。

自分がお世話になった4年間で、直ぐに辞めてしまったり、クビになってしまった人なども含めて少なくともトータルで30~40人のウェイトー、ウェイトレス、従業員の人と一緒に働かせてもらい、当時頻りに店に足を運んで頂いたお客さんの数を入れると数え切れないくらいの人と接する機会があったが、学生時代も含めて今でもあの時ほど濃い経験をしたことはない。また、自分が働いていた当時は今と違ってレストランの状況もかなり苦しい状況だったと聞かれている。だが、そのことが逆に同僚たちとの間に妙な結束感が生まれていたのかもしれない。今でも当時の仲間とは連絡を取り合っていて当時は懐かしむ機会も多い。おやじさんも含めて自分がお世話になった人で、現在もおの「Kレストラン」で働いている人もいるが、自分のように日本に引き上げて全く別の職に就いたり、家庭を持っている人もいたり、まだニューヨークに居るのか帰国したのか分らず行方不明状態の人も居たりと、皆それぞれ別々の人生を歩んでいるが、自分にとってあの4年という時間はもの凄く大きく、今でも自分の支えになっていく。「Kレストラン」が永遠に存続してくれることを願うと同時に、自分が犯した数々のオーダー・ミスのツケを何らかの形で返していきたいと思っている。